



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	マックス・ウェーバーの方法論（1）：メディア研究の方法論構築に向けて
Author(s)	山田, 吉二郎
Citation	国際広報メディア・観光学ジャーナル, 7, 69-97
Issue Date	2008-11-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/35150
Type	departmental bulletin paper
File Information	069-098YAMADA.pdf



マックス・ウェーバー の方法論（１）

—メディア研究の方法論構築に向けて—

山田吉二郎

abstract

Max Weber's Methodology, I: In Quest of the Methodology of Media Studies

YAMADA Kichijiro

This paper aims at discussing Max Weber's methodology, specifically based on his essay "Objectivity in Social Science and Social policy". It is well known that Max Weber made continuous efforts to construct modern social science; his *Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre* are full of highly suggestive ideas and concepts for students who are interested in methodology generally. If media studies is also expected to be one of genuine social and cultural sciences, every piece of Weber's thought will be important.

Every social reality is unique, concrete and infinitely rich; we cannot grasp it without constructing "ideal type" which is not *real* image of reality, but its *edited* one. It will be shown that Weber's "ideal type" is composed of three ingredients, that is, *economy*, *value* and *history*.

1 方法論とは何か

メディア研究の「方法論」を構築するにあたって、マックス・ウェーバーの「方法論」構築の努力がどの程度参考になるかを検討することが本文の目的である。ここでいう「方法論」とは、具体的な研究方法（社会調査の方法・統計処理法等々）ではなく、その研究領域があるまとまりを持つ、固有のものであり、ゆえにその領域を扱う学問が個別のディシプリンとして成立することを保証する抽象的な基礎概念群を意味する。研究の「準拠枠」という言い方も同じことを意味する。ウェーバーの時代には「文化科学の論理学」という言い方がしばしばなされた。ある特定の「事象」(Sache)がある特定の科学の対象として認識されるためには、予めそれに用いる諸概念の論理的関係が明らかになっていなければならないとする考え方をいう。例えば、経済的事象が経済学という科学の対象として認識されるためには、「分業」「市場」「資本」「労働」「交換価値」といった諸概念の論理的関係が予め明確に考察されている必要がある。そうして、初めて、個別の事象の特性を認識できることになる。逆に言えば、経験的な社会調査が科学的に実効性をもって行われるためには、その前提として「(諸)概念の論理構造」が明確化されている必要がある。シェルティングがそのウェーバー論の中で次のように述べていることは、本論で使われる「方法論」という用語の定義として妥当である。

「その〔方法論の〕認識目標は、なにか限定された経験的世界の領域にあるのではなく、概念の論理構造にある。それは事象的な科学の認識がそのなかで形成される概念の論理構造であり、あるいは科学の認識達成の手段として使われる概念の論理構造である。方法論において、新しい分野が、意識的な《世界認識》の圏内にひきいれられるのである。思考形式のなかみの事象のみでなく、思考形式じたいが認識の対象となる」¹（下線山田、以下、断りが無い限り、同じ）

下線部から分かるように、方法論の構築は、「事象的な科学の認識」の前提であり、その「手段」であって、「科学の認識」そのものではない。方法論構築がいかに困難でかつ有意義なものであっても、それだけでは「事象的な科学（メディア研究も、間違いなく、その一つであるが）の認識」は少しも前進しない、ということは銘記しておかなければならない。方法論構築は、学問研究の本筋ではなく、あくまで予備作業にすぎない。しかし、これから何度でも繰り返すであろうが、方法論がなければ、いかなる経験的社会調査も実効性を持つことはできない。

いま述べたように、メディア研究に限らず、事象的研究一般において重要なのは、方法論にもとづいて実際の研究がなされることで、その結果と

▶1 A.シェルティング「ウェーバー社会科学の方法論—理念型を中心に—」、石坂巖訳、れんが書房新社、1977〔1922〕。

して、構築された方法論が誤りのないものであることが証明されたり、または改善されたりする。本論文で検討するマックス・ウェーバーは膨大な量の「実作」の傍らで、大量の（と言っていると思うが）方法論的著作を残しているが、彼が偉大なのは、例えば、「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」を書いたからであって、「社会科学と社会政策にかかわる認識の『客観性』」を書いたからではない。ただし、後者を読むことで、前者の理解がより深まることは確かである（または、後者の理解が、前者の十全な理解の前提となっている、と言おう）。ウェーバーの方法論を学んだ者は、彼が、例えば、「支配の社会学」を研究する必然性を明確に理解できると思う。

メディア研究の方法論構築において、社会学の方法論構築過程を参考にしようと思うのは、2つの理由からである。1つは、いまメディア研究が方法論構築において苦勞しているのとまったく同様に、社会学も同じ課題に多大の労苦をこれまで払ってきたという点で、両者はよく似ているから。もう1つは、社会学が「社会とは何か」を考察する科学であるとするならば、同じ問いがメディア研究にとっても（「メディアとは何か」という問いと並んで）重要なものであることは殆ど確実であり、ゆえに、メディア研究と社会学は隣接する学問であろうと思われるから。

かつて社会学に関して言われたように、いまメディア研究について「メディア研究者の数だけメディア研究がある」と言っている状況が明らかに見てとれる。メディアとは何か、それはいかに考察されなければならないか、について、あまりにも多様な意見が流通していて、人は任意のテーマについて任意の方法で考察して、それを「メディア研究」と称することができると思えるほどである。ジャーナリズムおよびマス・コミュニケーション研究、情報テクノロジー論と身体論を融合させたメディア・パフォーマンス論、都市空間における広場の役割を論じたもの、交通・通信技術の発達と人々の意識の変化の相関を論じたもの、企業広報論、観光文化論等々——いずれも「メディア研究」と呼ばれ得る。それぞれの研究者は、意識的かどうかはともかく、自分の研究領域を「メディア研究」の中心として、他の研究領域をその周辺にあるものと想定していると思われるが、なぜ前者が中心で後者が周辺であるのか、その理由を説得的に述べることはまだ誰も成功していないようである。

これだけ多様な種類のメディア研究が現実存在するわけだから、それらを比較検討し集大成することで（すなわち、「概念の論理構造の認識」などという迂路を通らずに）、無媒介的に、ディシプリンとしてのメディア研究が構築できるのではないかと期待するのはむしろ当然であり、そういう試みが頻繁になされているが、その結果は思わしくない。例えば、デニス・マクウェールというイギリスの研究者が「マス・コミュニケーションの理論」²という好著を書いている。これは、それまでに発表されたマスメディア理論を丹念に集成して分類することで、そこから何かが出て来ることを期待して書かれたものである。序文で、彼は執筆意図についてこう書いている。

▶2 竹内郁郎、三上俊治、竹下俊郎、水野博介訳、新曜社、1985〔1983〕。

「それは、実証された知見を整理してまとめるというよりも、むしろ研究を通じて得られた理論的成果に着目して、枠組の構築と業績のとりまとめを行う、という戦略である。この戦略は単に実際上の困難を回避するための対応策というだけにとどまるものではない。すなわち、メディア研究がこれまでに依拠し、また、ある程度までその構築に寄与してきた理論は、多少とも関連のありそうな研究課題をただ単に集約するという以上の意味をメディア研究に与えるものだという仮定である。実際マス・コミュニケーション研究は、かなり広い分野を扱っている学問だと考えられるのである」³

▶3 同上、pp.iii-iv。

マクウェールの言っていることは、メディア研究者なら一度は考えることである。すなわち、これほどまでに多様な（マス）メディア理論が現われているのだから、それらを丹念に集めて、分類して整理すれば、そこから何らかの共通項が浮かび上がるであろう。それが「学問としての」メディア研究の基礎となるのではないか、ということである。この、一見自然に思える試み（私自身の経験⁴も含めて）がなぜうまく行かないかというと、既存の（マス）メディア研究の整理・分類（マクウェールのいう「業績のとりまとめ」）に関する基準こそ「方法論」の与えるものであるのに、それが不在状態で整理・分類をして、そこから（最初にあるべき）「方法論」（マクウェールのいう「枠組」）の構築を図る、という、この問題特有の錯誤に陥るからである。それが意味するところは、メディアを研究することとメディア研究の「方法論」を研究することはまったく別のことだということであり、このことは本論でも何度か触れなければならない。

▶4 「マスメディア研究序説—研究対象としての新聞—」、北海道大学、「国際広報メディアジャーナル」第2号、2004、pp.79-94。

マクウェールは自著の終わりの方で、「メディア理論の根本的欠陥」について、2つの側面があることを指摘している。

「この本をずっと読んでこられた人、あるいはこのフィールドになじみの深い人は誰でも、メディア理論の欠点と限界に気づいているであろう。メディア理論はしばしば定式化において厳密さを欠き、特定の予測にとって有用な基盤をめったに提供してくれない。理論を構成している命題はほとんど体系的な検証を受けていないし、提案者のイデオロギー的立場にしたがって大きく変わったり限定づけられたりする。同じ理論的問題が、いろいろ違った形で定式化されたり、また、非一貫的な、時には互いに矛盾するような形で定式化されたりすることも、決してまれではない。またある人々にとっては、メディア理論の根本的欠陥は、マス・コミュニケーションの実務との関係が非常に稀薄で、理論のなかの知識が送り手として成功するための必要にこたえてくれるものとは考えられない、という点にある」⁵

▶5 マクウェール前掲書、p.262。

この引用の最後の部分で述べられている実務的欠陥の指摘は、メディア研究に限るものではなく、社会科学も常に、「社会政策の学」として「実務との関係」を問われてきた。そういう中で、社会学の創始者たち（マック

ス・ウェーバーその他)は、社会学を真の学問とするために戦ったわけであり、その戦いの中心は「方法論の確立」にあった。メディア研究が理論的にも実践的にも中途半端なままにとどまっているとするならば、その原因の1つは、「方法論」を確立する前に「実務に役立つ」ことを性急に志向している点にある、と言えるように思う。

マクウェールの著書は便覧またはガイドブックとして重宝なもので、その意味でよい教科書と言えるが、いま上で述べた意味での「方法論」確立の助けになるかということ、残念ながらそうは言えない。マクウェールの弱点は、学問構築のために必要な叙述の正確さ・厳密さに欠ける点にある。このことは「メディアに関する公共的定義」と題された節に顕著に現れている。「公共的定義」とは聞きなれない表現であるが、「一般に認められている」⁶ 定義という意味であるらしい。それは、要するに、「常識」または「通念」であろう。「常識」「通念」に立脚した学問はない。しかし、そのこと以上に問題なのは、マクウェールの次のような考え方である。

「以上要約的に述べた諸次元(個人的／集合的、政治性、文化性、社会関係、組織性)は、メディアに関して一般に認められている公共的定義を構成するものであり、以下の頁のガイドラインとなろう。その目的は、個々のメディアについて一定の合成像を創り上げることにある。それぞれのメディアの制度的形態や、メディア自身による自己イメージや、受け手の経験などにみられる主要な特徴が、その合成像の形成に対して、何らかの寄与を果たすというわけである」⁷

こう述べたあと、マクウェールは各メディア(書籍・新聞・映画・ラジオ・テレビ・レコード)を、各次元において程度の高いものから低いものへと並べた一覧表を掲載している。その配置の根拠は著者の印象であるらしく、例えば、「国家にとって中心的か周辺的か」の軸では、「中心的」メディアとして新聞とテレビが挙げられ、「周辺的」メディアとしてレコードが配置されている。残りの「書籍・ラジオ・映画」は中間に配置されているが、その理由づけは恣意的である。他の次元についても同じようなもので、そこから、例えば、テレビというメディアについて明確なイメージが出てくるかどうか、おぼつかない。

上の引用からは、マクウェールに限らない、メディア論一般に共通する問題点が透けて見える。それは、メディアの特性をなす「要素」(この場合なら「個人的／集合的、政治性、文化性、社会関係、組織性」)を単なる印象にもとづいて抽出してよいと思ったこと、しかも、それを「一般に認められている」ことを根拠に「公共的定義」という誇大な表現で粉飾したことである。この態度(すなわち、「常識」「通念」を疑わずに、かえってそれに依拠する態度)は正しい意味での「学問構築」の大敵である。「通念」に依拠するならば(そして、それでことがすむのなら)、学問(科学)は不要であるから。

マクウェールの悪口を言うのが目的ではないので、この辺でやめるが、

▶6 同上、p.16。

▶7 同上。

もう1つだけ、見逃すことのできない誤解がある。彼の著書は教科書として広く使われているようなので、この種の誤解がメディア研究の学生たちに広まる恐れがある。いま見た、各メディアの特性の「合成像」をマクウェールは「理念型」と呼ぼうとしている。

『『メディアの定義』は、すでに環境と経験と印象の融合したものとして記述されてきた。概念としては、その知的な起源は次のようなものを含んでいる。(1) 操作可能な構成概念を作るために、現実のもつ主要な特徴を選択したり強調するという作業を伴う、ウェーバー流の『理念型』……」⁸

▶8 同上、p.17。

ウェーバーの「理念型」という概念について、それがどういうものであるかを検討するのが本論の目的の1つであるから、ここで詳しく述べることはしない。ただ、それは「環境と経験と印象の融合したもの」ではまったくないことだけはいま言うておいてもいいだろう。「現実のもつ主要な特徴を選択したり強調する」は表現上は間違っていないが、さきほど見た「合成像」は「理念型」とは関係ないので、彼がここで言っていることも厳密には違っているのであろう。「操作可能な構成概念」は「作業仮説」という程度の意味であろうか。メディア研究がこの種類の安易な思考レベルに安住している限り、いつまで経っても「学問」とは無縁である。

2 ウェーバーのメディア研究

ウェーバーの方法論の検討に入る前に、もう少し寄り道をしたい。彼が「新聞（Presse）の社会学」に取り組むつもりでいたという、興味深い事実についてである⁹。ウェーバーは、ドイツ社会学会の共同研究として、かなり大規模な新聞社調査を提案した。彼が書いた「新聞の社会学に関する調査のための『覚書』」によれば、調査の内容は次の2つに大別される。

1. 事業体としての新聞：資本金、新聞発行の諸経費、社員の報酬、通信社の実態、ニュースソース、編集業務、広告業務その他、「厳密な計量的基礎」¹⁰に立った調査、及び外国との比較。

2. 上記の量的調査のあとを受けて、質的調査を行う：「世論の育成の促進もしくは阻止への」¹¹ 影響、「新聞の、……近代人の感情状態と思考習慣への影響、政治的、文化的、芸術的経営への影響、大衆の判断と大衆の信仰の形成と解体への影響」¹²、及び外国との比較。

ラザースフェルドとオーバーシャルは、ウェーバーが社会学における社会調査の役割に関してきわめてアンビヴァレントであったろうと推測しつ

▶9 このことは、日本では、上山安敏氏が論文「マックス・ウェーバーとドイツ社会学会」（みすず書房、M・ウェーバー「社会学・社会政策論集」付録、1978）で言及し、米沢和彦氏が著書「ドイツ社会学史研究—ドイツ社会学会の設立とヴァイマル期における歴史的展開」（恒星社厚生閣、1991）の付録として、翻訳「マックス・ウェーバー“新聞の社会学に関する調査のための『覚書』”」（1910）を刊行して、ウェーバーの意図を明らかにした。英語圏では、ラザースフェルドとオーバーシャルが好論文「マックス・ウェーバーと経験的社会調査」（1965）において、ウェーバーにとっての社会調査の意味と重要性を指摘する中で、このことに触れている。Paul F. Lazarsfeld, Anthony R. Oberschall, Max Weber and Empirical Social Research, *American Sociological Review*, Vol. 30, No. 2 (Apr., 1965), pp. 185-199.

▶10 米沢前掲書、p.278。強調はウェーバー。

▶11 同上。

▶12 同上、p.281。

▶13 ラザースフェルド、オーバーシヤル前掲論文、p.189。

▶14 マックス・ヴェーバー「職業としての政治」、脇圭平訳、岩波文庫、2003、pp.42-48。

▶15 同上、p.22。強調はヴェーバー。

▶16 同上、p.51。

つ、同時に社会調査における彼の「手並みの鮮やかさ」(the brilliance of his procedure)¹³に言及している。確かに、ウェーバーは、やろうと思えば何でもできた人なのであろう。もしこの新聞調査が実現していたならば、そこから彼がどのような結論を引き出してきたかは実に興味深いことであるが、しかし、彼の才能を持たない者には想像することすらできないことである。特に、「世論」及び「大衆の判断と大衆の信仰の形成と解体」について彼が言うはずであったことを聞けなかったことは、メディア研究者にとって、やはり、損失である。

この「新聞の社会学」については、ウェーバー研究者以外にはあまり知られていないが、それとは別にもう1つ、こちらは比較的よく知られているウェーバーのメディア研究計画がある。それは、最晩年の講演「職業としての政治」で言及されている「近代の政治的ジャーナリズムの社会学」(die Soziologie der modernen politischen Journalistik)¹⁴である。政治を「職業」(すなわち、経済的基盤)との関連で論じる視点はウェーバー独特のものであると同時に、彼の方法論(すなわち、社会を社会的行為から解明しようとする)に明確に根ざしている。「政治のために」生きる者と「政治によって」生きる者の区別は、理念型として重要である。

「政治を恒常的な収入源にしようとする者、これが職業としての政治『によって』生きる者であり、そうでない者は政治『のために』ということになる。ひとがこういった経済的な意味で政治『のために』生きることができるようになるためには、今の私有財産制度の支配下では、若干の……前提が必要である。つまり当人が……政治から得られる収入に経済的に依存しないですむこと、ずばり言えば、恒産があるか、でなければ私生活の面で充分な収入の得られるような地位にあるか、そのどちらかが必要である」¹⁵

ウェーバーが、近代社会において政治の運営を担う2種類の人間類型として、「官僚」と「カリスマ的政治家」をあげ、両類型の信念の持ち方の違い(責任倫理と心情倫理)を論じたことは有名であるが、上の引用にある「経済的依存」の程度も、理念型の重要な要素として考慮されていることは記憶しておくべきである。すなわち、「政治から得られる収入」に全面的に依存する「官僚」的類型とそうではない「政治家」的類型が考えられている。近代初期における後者の典型として、「名望家」(Honoratioren、「いわゆる『教養と財産』をもった人々」¹⁶)について詳しく述べられているのはそのためである。近代の進展とともに、名望家政治が退き、恒産をもたない人々(その典型として、ウェーバーは弁護士とジャーナリストに注目している)が政治家として登場してくる。次の描写は、もちろん、理念型としてなされているのであるが、ドストエフスキーの初期短編にでもありそうな叙述である。

「このジャーナリストのキャリアが、ともかく職業的な政治活動にいたる最も重要なコースの一つであることに変わりはない。ただしそれは万

人向きのコースではない。なかでも性格の弱い人間、ことに、身分的に安定した地位にいないと精神のバランスがとれないような人間には最も不向きである。……ジャーナリストの生活を続けていくうちに何度かなめる苦い経験——そんなものはおそらく最悪の事態でもなんでもない。成功した暁にこそジャーナリストには特別に困難な内的要求が課せられる。世間の有力者のサロンで、一見対等に、しばしば皆からちやほやされて……交際するという、しかも自分がドアの外に出た途端に、おそらく主人はお客様の前で『新聞ゴロ』との交際について弁解これ努めるに違いない、と分かっているがなおかつ連中とつき合うというのは、それこそ生やさしいことではない」¹⁷

▶17 同上、pp.47-48。

しかし、この描写が小説的ではなく、理念的だと言わなければならない理由は、ここに描かれているジャーナリストが個性ではなく類型であるということ、ジャーナリストを送り出した途端に弁解を始める「世間の有力者」は衰えつつある「名望家」であって、つまり、ここには政治のヘゲモニーをめぐる新旧階層の闘争が描かれているからである。

ウェーバーは「カリスマ的政治家」の現代的タイプをあえて「デマゴグ」(Demagogue)という挑発的な名称と呼んで、その供給源の1つとしてジャーナリストを考察した。それは、ジャーナリストがメディアを駆使できるからである。

「立憲国家、とくに民主制が成立して以来、『民衆政治家（デマゴグ）』が西洋における政治指導者の典型となっている。この『デマゴグ』という言葉には後味の悪いニュアンスがつきまとっているが、だからといって、この名前で呼ばれた最初の人々がクレオンではなく、ペリクレスであったという事実を忘れてはならない。……なるほど現代の民衆指導でも演説という手段が用いられている。……しかし効果の点でより永続的なのは印刷された言葉である。政治評論家、とくにジャーナリストは今日この種の人間の最も重要な代表者である」¹⁸

▶18 同上、p.42。強調はウェーバー。

「演説」から「印刷された言葉」へのメディアの変遷がウェーバーの視野にあったことは明白であるが、それはメディア研究としてではなく、「支配の社会学」の一要素としてであることは注意すべきことである。ウェーバーが政治を論じるとき、「支配と服従」という社会的行為の枠組みを設定し、そこから官僚制その他、「支配の類型」を論じることが特徴であり、それがウェーバー社会学の方法論の一部であることをこれから私は本論において検証しようと思っている。

さて、それではウェーバーの2つのメディア研究計画、「新聞の社会学」と「ジャーナリズムの社会学」の延長線上に、私たちが探し求めている「メディア研究の方法論」があるのかというと、それは必ずしもそう簡単ではあるまいと思う。もし現代社会が、ウェーバーの見た社会と同じように、基本的に「支配と服従」の図式で理解できるものであるならば、メディア

研究は「支配の社会学」に含まれる（ということは、その一部となって、一個の、独立したディシプリンを形成するものではない）わけであるが、もしそうではなくて、現代社会は、支配行為と服従行為の相関以外に、社会構造や社会システムを考慮しないかぎり、そしてそこにおけるメディアの役割を考察しないかぎり、解明できないとするならば、「メディア研究の方法論」はウェーバー社会学の方法論の単なるコピーでは不十分だということになる。では、なぜ本論で私は、「メディア研究の方法論」探究の一環としてウェーバーの方法論を検討するのか、というと、私はウェーバーの「新聞の社会学」および「ジャーナリズムの社会学」とはやや別のところに、「メディア研究」へのヒントを見出し得るような気がしているからである。それがどこであるかは、本論において順次述べるべきことであろう。

本論に入る前に、もう1つだけ付け加えておきたい。ウェーバーは新しい学問の方法論を執拗に考えた人であり、彼の思考の軌跡は、さまざまな時期に書かれた12編の論文からなる「学問〔科学〕論集」¹⁹に集成されている。ウェーバーの社会学者としての名声が確立するにつれて、この「学問論集」もある種の権威をもって受け入れられるようになったが、この論集は、彼自身が編集したわけではないので、首尾一貫性に欠ける面があり（というよりも、互いに矛盾している面もあり）、ウェーバー研究者を悩ませている。

例えば、テンブルックは「マックス・ヴェーバー方法論の生成」²⁰において、ウェーバーの神格化（ウェーバーの方法論的「天賦の才能」礼賛、彼の科学論の「非歴史的体系化」）を批判して、次のように述べている。

「ヴェーバーは、1903年から1909年まで毎年1本ずつ、1906年には2本の、方法論的研究論文を生み出したにもかかわらず、方法論についての実質的論稿は、ほぼ1904年だけに限られているのである。……したがって、客観性論文以後の一連の方法論的著作は、質の低下、関心の縮小、内容の狭小という方向によって特徴づけられるのである」²¹

「客観性論文」とは、これから少し詳しく見て行きたいと思っている「社会科学と社会政策にかかわる認識の『客観性』」（1904）のこと。この著作が、他の方法論的著作と比較して、質的完成度が高いことは誰もが認めることであろうが、それ以後の著作に「質の低下、関心の縮小、内容の狭小」を見るということは、それらを読む必要はないと言っているのと同じことになる。それは研究者にとって一見好都合な、しかし危険な忠告である。

テンブルックは、ウェーバーの方法論的著作の論争的性格を強調し、そうすることで、ウェーバーの神格化・非歴史的体系化を破砕しようとする。

「方法論的諸著作自体が、そもそも〔それへの〕天職の自覚や情熱を証言していない。ある明らかな無雑作、いやそれどころか無頓着は、見間違いない。……彼が方法論の研究活動に欣喜雀躍として別れを告げたと

▶19 Max Weber, *Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre*, Tübingen, 1968.

▶20 住谷一彦・山田正範訳、未来社、1985〔1959〕。

▶21 同上、p.24。

いう推測は、彼が未完成の方法論的諸研究を前にしながら、以前にあれば力を注いだその活動に突然背を向けた……という事実があるだけに一層許されるだろう」²²

▶22 同上、pp.28-29。

ここで「明らか」だとされている「無雑作」「無頓着」は印象の問題であるから、厳密な意味での証明は困難であろう。ウェーバーが方法論的著述に「突然背を向けた」という主張も、「理解社会学のカテゴリー」「社会学の根本概念」「職業としての学問」はいずれも方法論的著作とは言えない²³というテンブルックの前提を受け入れて、初めて意味を持つ。そうでなければ、ウェーバーは何はともあれ、生涯にわたって方法論にこだわったという、平凡な事実を直視しないわけにはいかない。

▶23 同上、p.26。

ウェーバーの方法論的著作が論争的なもの（すなわち、歴史的なもの）であるというテンブルックの主張は正しいであろう。「ある学問分野のある特定の危機」²⁴の自覚がウェーバーにおける方法論的研究の端緒であったとするテンブルックの指摘に、私は全面的に賛同するが、その「危機」が「客観性論文」でほぼ克服されて、ウェーバーはすみやかに「即事象的な研究への即座の復帰」²⁵をなしとげたとあるのは、私の読後の印象とは少し違う。このことは後でまた触れる機会があるだろう。

▶24 同上、p.30。

ウェーバーの方法論に関して、W・J・モムゼンはより穏健な意見を述べている。

▶25 同上、p.32。

「〔論集〕最後の論文『《理解》と《理念型》——歴史的社会科学の方法論について——』は、すっかり忘れられていたマックス・ヴェーバーの方法論のいくつかの視座を論じている。これは、マックス・ヴェーバーの科学論に新しいものはなにもない、としたテンブルックの考察に部分的に異論を唱えるものである。ヴェーバーはたしかに非常に多くの点で歴史的伝統に忠実ではあったが、彼の科学論は、文化科学・社会科学を本質内在論的〔イマネンティスティッシュ〕な歴史主義の軛から解放することを目論むものであった。……歴史学や社会諸科学が歴史的次元を再発見しようとしているかぎり、ヴェーバーのこの目論見は、とくに今日の方法論争のために大きい意義を有する」²⁶

▶26 ヴォルフガング・J・モムゼン、
「マックス・ヴェーバー 社会・政治・歴史」、中村貞二・
米沢和彦・嘉目克彦訳、未来社、
新装版1994〔1974〕。

モムゼンがここで「歴史主義の軛からの解放」の志向をウェーバーのうちに見て、それが「歴史的次元の再発見」という現代的課題に直接関わるものであることを指摘していることは重要である。これは、テンブルックが「ある学問分野のある特定の危機」と述べたことと、恐らく、関連がある。モムゼンは、次の一節で同じことをもう少し詳しく解説している。

「歴史学は現在その方法論的基礎を大きく組み替えるべき時期にきている。……歴史家本来の任務はたゆみない史料批判と事実蒐集にあるとした十九世紀後半の歴史記述における素朴な実証主義も、理解の説を心理学化して『追体験』の理論に変形したうえ、歴史家とその対象との方法的同一

▶27 前掲書、pp.327-328。

▶28 マックス・ウェーバー「職業としての学問」、岩波文庫、尾高邦雄訳、2002〔1919〕、p.54。ただし、この訳では「多神論」とある。

▶29 マックス・ヴェーバー「社会科学と社会政策にかかわる認識の『客観性』」、岩波文庫、富永祐治・立野保男訳、折原浩補訳、2001〔1904〕、p.48。

化の原則をつきつめ、歴史を諸世界観の束にまで解体してしまったラディカルな歴史主義も、ともに道を誤ったということ、これである。今日ではじつにさまざまな仕方で、歴史学の陥ったそうした二重のディレンマからどう抜け出せばよいかが模索されている。そのさい特殊任務を受け持っているのが社会科学への再度の接近ということである²⁷

モムゼンによれば、ウェーバーは、歴史を歴史家個人の世界観に還元する「歴史主義」から解放するとともに、事実を積み重ねることで歴史の再現が可能であるとする「素朴な実証主義」にも陥らない、第3の道の探究を目指した、ということになり、ウェーバーの方法論探究をそのためのものとして解釈している。やがて詳しく検討することになるが、ウェーバーはリッケルトに倣って、この「歴史家個人の世界観」を「価値」または「価値理念」と呼んで、それが社会的・文化的事象に内在するものではないことを繰り返し述べる。しかし、このことは、「価値」が多様なものであることを容認することを意味する。ウェーバーによれば、現代社会は、古代ギリシア社会と同様な、神々が絶えず争う「多神教」²⁸の社会であらざるを得ない。この社会が「価値の多様化」をどのように克服して、ある安定性を獲得するのか、ウェーバーにおけるその仕組み探究の努力は、方法論探究と一体をなしている。

3 「社会科学と社会政策にかかわる認識の『客観性』」(1904)

ウェーバー方法論の探究はこの著作（以下、「客観性論文」と略称する）から始めるのが普通である。有名な「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」とほぼ同時期に書かれたもので、前者で方法論として述べられたことが、後者では実際の（即事象的）研究として結実している、という関係が見られる。「理念型」概念も、前者で抽象的に述べられたものが後者では作品として実現している、という構図である。テキストに即して、考察を進めて行きたい。

社会を構成するのは「人間」であるが、その「人間」（すなわち、人間類型）には2種類ある、とウェーバーは言う。「思考する研究者」と「意欲する人間」²⁹である。前者は端的に言えば「科学者」、後者はそれ以外の人々（社会においてさまざまな行為をする人々、すなわち「行為者」）であるが、社会を構成する人間類型として「科学者」「観察者」（パレート）「専門家」（リップマン）をそれ以外の人々（「行為者」）と対比するのは、ウェーバーに限らず、この時代（20世紀初頭）の「新しい学問」の探究者たちに共通の特徴である。だから、私たちはそのことを「共通の特徴」として記憶すると同時に、その意味を考えなければならない。

「〔主観的に抱かれた〕意味をそなえた人間の行為につき、思考を凝らして、その究極の要素を抽出しようとする」、どんなばあいにもまず、そうした行為が『目的』と『手段』の範疇に結びついていることが分かる。われわれがあるものを具体的に意欲するのは、『そのもの自体の価値のため』か、それとも、究極において意欲されたものに役立つ手段としてか、どちらかである」³⁰

▶30 同上、pp.30-31。

〔 〕は訳者の補足だと凡例にある。ゆえに、引用の最初の部分は原文ではただ「意味をそなえた人間の行為」とあるわけだが、それでは分かりづらいと考えた訳者の心意はよく理解できる。ウェーバーが、社会の中心に「人間の行為」を見たこと、その「行為」は「意味」を担うものであるが、その「意味」(Sinn)は客観的意味ではなく「主観的」意味である、と考えたことは、ウェーバーの著作を読み続けた者にはよく知られていることである。しかし、どうして「主観的」意味なのかは必ずしも自明ではない。この考え方はウェーバーの最晩年の著作において「社会学の根本概念」として定式化されるが、上の引例はその早い例の1つである。

「思考を凝らして、その究極の要素を抽出する」とあるのを単なる表現の綾とみなさないようにしよう。メディア研究の基礎がなかなか定まらないのは、(マクウェールの例で見たように)「思考を凝らさずに」、印象で「要素を抽出する」からである。それでは、ウェーバーの目標とする「認識」に到達できない、ということになる。

さて、「意味をそなえた行為」の「究極の要素」としてまず「抽出」されるのが「目的」と「手段」であると、ウェーバーは言う。「目的」とは「具体的に意欲されたもの」であるが、その「目的」が意欲されたのは、「そのもの自体の価値のため」か、それとも他のものの「手段」としてであるか、どちらかである。後者の場合、その「他のもの」は最終目的か、またはさらに上の(または内奥の)「目的」のための「手段」か、のどちらかであろう。こうしてどこまでも遡って行くから、結局、「究極において意欲されたもの」(すなわち、究極の目的)か、そのための「手段」であるか、どちらかである、ということになる。

ところで、「究極において意欲されたもの」という表現には、個々人の「主観的な」価値を超えた、その社会における「究極の価値」というニュアンスがあるように感じられる。明らかにウェーバーは、「〔主観的に抱かれた〕意味」または「考えられた目的」の背後に(または内奥に)、客観的または社会的な「究極の価値」を見ようとしている。しかし、それと同時に、社会的行為がすべて客観的・社会的「究極の価値」から説明できると彼が考えていないこともまた明らかなことである。なぜなら、もしそうなら、「〔主観的に抱かれた〕意味をそなえた人間の行為」から出発する必要はまったくないわけだから。

「科学的考察の対象となりうるのは、(1) 目的が与えられたばあい、手段が、どの程度適しているか、という問いに答えることである。われわれ

- ▶31 同上、p.31。以下、強調はすべて私のものと考えていただきたい。ウェーバーはこの論文において強調を多用している。私は引用に当たって、ウェーバーの強調はすべて無視して、私の論証の必要に応じて独自の判断で強調を施した。
- ▶32 同上、p.73。

は、(われわれの知識の、そのときどきの限界内で) いかなる手段が、ある考えられた目的を達成するのに適しているか、それとも適していないか、ある妥当性をもって確定することができる。だから、このようにすれば、採用可能な特定の手段で、ある特定の目的をおよそ達成できるかどうか、その客観的可能性がどの程度か、見積もることができる。ということはつまり、間接的には、当の目的を立てること自体をも、そのときどきの歴史的状況に照らして実践上意味があるとか、あるいは、与えられた事情に照らして無意味である、というふうに批判できる、ということである」³¹

ウェーバーが考える「新しい社会科学」は、現実社会の解明に役に立つ「現実科学」³²であることを目指すものである。上の引用は、彼が考えている新しい学問に何ができるかを述べたものである。「科学的考察」をなすのは「科学者」（すなわち、「思考する研究者」）であって、個々の「意欲する人間」ではないだろう。「考えられた目的」に対する手段の適合性を「ある妥当性をもって確定すること」が、この新しい学問の第1の効用だとされる。

もし「ある妥当性をもって確定すること」が可能であれば、次いで「特定の手段で、ある特定の目的を達成できるか」どうか、その「客観的可能性」の「見積もり」が可能となる（新しい学問の第2の効用）。少し先走って言えば、ウェーバーが社会的行為について「特定の手段」「特定の目的」というとき、彼は概して「経済」を考えている。ここのように主張することはしないが、「特定の手段で特定の目的を達成できるかどうかを見積もることができる」、しかも、その見積りに「ある妥当性」があるのは、それが主として経済について語られているとするならば、納得が行く。これについては、あとでまた触れる機会があろう。

新しい学問の第3の効用は、その「特定の」目的そのものを「批判」することができることであるが、その際、ウェーバーは「そのときどきの歴史的状況に照らして」という条件を付けている。この条件は、当然ながら、「新しい学問」のもう1つの条件「われわれの知識の、そのときどきの限界内で」と関連があるはずだから、「われわれの知識の限界」のうちには「そのときどきの歴史的状況」の知識が含まれるということになる。ウェーバーの考える「新しい社会学」には歴史的 성격があり、そこに「批判」の基盤があることを覚えておこう。

「さらに、われわれは、(2) もしある考えられた目的を達成する可能性が与えられているように見えるばあい、そのさい必要とされる手段を適用することが、あらゆる出来事のあらゆる連関をとおして、もくろまれた目的のありうべき達成のほかに、いかなる〔随伴〕結果をもたらすことになるかを、当然つねに、そのときどきのわれわれの知識の限界内においてではあるが、確定することができる。そうすることで、われわれは、行為者を助けて、かれの行為の意欲された結果と、意欲されなかったこの〔随伴〕結果との〔相互〕秤量が、できるようにする。すなわち、われわれは、意

欲された目的の達成が、予見できる出来事の連鎖を介して、他のいかなる価値を損なうことになるか、そうした形でなにを『犠牲にする』か、という問いに答えることができる」³³

▶33 同上、pp.31-32。

新しい学問の第4の効用は、「ある考えられた（特定の）目的」を達成するために特定の「手段」を適用することによって、「意欲された結果」のほかに「意欲されなかった結果」が生じることを予測できることである。そうすることで、科学者は、ある特定の目的を達成することで、「他のいかなる価値を損なうことになるか」を予見することができる、ということになる。「意欲する人間」が「特定の」目的と手段に固執するのに対して、科学者は、「特定の」価値と「他の」すべての価値との比較（秤量）ができるのが、両者の大きな違いである。その際に、科学者に要請される条件は2つである。1つは、前にも出てきた「そのときどきのわれわれの知識の限界」（すなわち、その限界内のすべての知識の駆使）であり、もう1つは「あらゆる出来事のあらゆる連関をとおして」である。ただし、後者はそれを文字どおりに取れば、可能なこととは思えないが、ここでは保留としておく。

「この秤量自体に決着をつけることは、もとより、もはや科学のよくなしうる任務ではなく、意欲する人間の課題である。そこでは、意欲する人間が、自分の良心と自分の個人的な世界観とにしたがって、問題となっている諸価値を評価し、選択するのである。科学は、かれを助けて、あらゆる行為、したがって当然、事情によっては行為しないこともまた、それぞれの帰結において、特定の価値への加担を意味し、従って通例……他の諸価値にたいしては敵対することになる、という関係を、意識させることはできる。しかし、選択をくだすのは、意欲する人間の課題である」³⁴

▶34 同上、pp.32-33。

科学は「秤量」するが、しかし「決着をつける」「選択をする」ことはできない。それは「意欲する人間の課題」である。「意欲する人間」が「自分の良心と自分の個人的な世界観とにしたがって」（すなわち、「特定の良心と特定の世界観にしたがって」というのと同じ）「諸価値を評価し、選択する」とされるのに対して、新しい科学の担い手である「思考する研究者」は、不行為を含む「あらゆる行為」が「特定の価値への加担」（＝「他の諸価値への敵対」）を意味するということを「意欲する人間」に「意識させる」ことが任務とされる。科学は「あらゆる」価値を「秤量」し、意欲は「特定の」価値を「選択」する。

「意欲する人間」の行為は「主観的な意味」を担っているという観察がウェーバーの新しい学問の出発点であり、行為には、必ず「特定の価値への加担」が発見できる。ここではまだはっきりしないが、個々の「意欲する人間」が主観的・個別的な動機（「意味」）から行う個々の行為が、「帰結において」、ある「特定の価値」を形成する、という観察がなされている。この「価値」が主観的・個別的なものにとどまるのか、社会的行為を通過することで、社会的・集合的なものに転換されるということなのか、まだ

分らない。

「意欲する人間がこうした決断をください、さらにわれわれが提供できるのは、意欲されたものの意義にかんする知識である。われわれは、具体的な目的の根底にある、あるいはありうる『理念』を、まず開示し、論理的な連関をたどって展開することにより、かれが意欲し、選択する目的を、その連関と意義とに即して、かれに自覚させることができる。」³⁵

▶35 同上、p.33。

科学が「意欲する人間」（行為者）に提供できるものは「意欲されたものの意義にかんする知識」である、という。「意欲されたもの」とは、これまでの表現では「考えられた目的」または「〔主観的に抱かれた〕意味」であろうが、その「意義にかんする知識」とはどういう意味であろうか。すぐあとに書かれていることがその答えであるとするならば、それは「具体的な目的の根底にある『理念』を開示し、それを論理的に展開したもの」ということになる。ウェーバーはしばしば「意義」（Bedeutung）という言葉を使うが、それは「具体的な目的の根底にある理念」に関わるものだということは記憶しておかねばならない。「かれが意欲し、選択する目的を、その連関と意義とに即して」の「意義」も同じ。「意欲」「目的」の根底に「理念」があることを言っている。それを「かれ（行為者）に自覚させる」ことは、学問の仕事とされている。

「というのも、人間の文化生活にかんするあらゆる科学のもっとも本質的な任務のひとつは、いうまでもなく、こうした『理念』—そのために、現実に、あるいは想像の上で、闘いがなされてきたし、現に闘いがなされている『理念』—を解明して、精神的に理解させることにある」³⁶

▶36 同上。

「人間の文化生活にかんするあらゆる科学」という言い方は、ウェーバーもまた、リッケルトに倣って、自然科学に対する文化科学という対立概念で³⁷、自分の新しい学問を捉えていたことを語っている。「理念」の解明が社会科学の「本質的な任務のひとつ」とされる。「理念」に関して「そのために、現実に、あるいは想像の上で、闘いがなされてきたし、現に闘いがなされている」と書かれているのは、晩年の講演において「多神教」と呼ばれた状況を指している。「理念」は、人々の「意欲」「目的」の根底にひそむものであるとするならば、それは社会を根本において規定するものである。やがてウェーバーは「価値理念」という言葉を使うようになるが、その意味するところを確定して行くことが私たちの課題となる。

▶37 リッケルト「文化科学と自然科学」（佐竹哲雄・豊川昇訳、岩波文庫、2002〔1898〕）：「文化客体の特殊な意義に基づき自然科学と文化科学とを類別すれば、それで特殊研究に従事する人々を二つの群に分かつ関心の対立もまた最もよく言い表わされているであろうと思う。従って自然科学と文化科学という区別は、自然科学と精神科学という一般に行われている類別に取って代わるべきだと私には思われる」（表記は現代風に改めている。pp.42-43）。

「文化現象の総体が『物質的』利害の布置連関の所産ないしは関数として演繹できるとする、時代遅れの信仰からは自由に、社会現象と文化現象を、それらがどのように『経済によって制約され』、また『経済を制約する』のか、という特定の観点から分析することは、実り豊かな創造性をそなえた科学上の原理であつたし、慎重に適用して独断に囚われさえしなけ

れば、今後いつまでも、そうした原理でありつづけるであろう」³⁸

最初の部分は、言うまでもなく、「唯物論的」思考への批判である。ただし、俗流マルクス主義的な経済還元主義は拒否されるものの、社会・文化を経済という「特定の観点」から分析することは、ウェーバー社会学の大きな特徴となる。「実り豊かな創造性をそなえた科学上の原理」とある以上、ウェーバーはすべての社会現象の根底にあるものの1つとして「経済」を見たわけで、「われわれの知識の、そのときどきの限界」「そのときどきの歴史的状況」および「あらゆる出来事のあらゆる連関」の中心にあるものの1つが経済であった、と言える。もちろん、ウェーバーにあっては、経済と社会・文化は相互制約的であること、その様相は「そのときどきの歴史的状況」によって異なるとされるから、「どのように」相互制約的であるかが研究の中心になることに注意したい。

「文化生活ないしは……『社会現象』の分析であって、特定の『一面的』観点をぬきにした、端的に『客観的な』科学的分析といったものは、およそありえない。社会現象は、——明示的にせよ黙示的にせよ、あるいは、意識的にせよ無意識的にせよ——そうした一面的観点到にしたがって初めて、研究対象として選出され、分析され、組織立って叙述される」³⁹

この部分は、「特定の『一面的』観点を一般論として、「任意の観点」と考えると誤読になる。既に述べたように、ウェーバーが「特定の『一面的』観点を」というとき、それは多くは「経済の観点」であって、それ以外の「一面的観点を」は一切考えられていない。社会現象は「経済の観点」に従うことで初めて、「研究対象として選出され、分析され、組織立って叙述される」というのがウェーバーの主張である。ただし、彼の言う「経済の視点」とはどのようなものかはまだまったく分からない。

「われわれが推し進めようとする社会科学は、ひとつの現実科学である。われわれは、われわれが編入され、われわれを取り囲んでいる生活の現実を、その特性において——すなわち、一方では、そうした現実をなす個々の現実の連関と文化意義とを、その今日の形態において、他方では、そうした現実が、歴史的にかくまって他とはならなかった根拠に遡って——理解したいと思う」⁴⁰

新しい社会学は「現実科学」だという。その意味するところは、「われわれが編入され、われわれを取り囲んでいる生活の現実を、その特性において理解」することだとされる。何を理解するかというと、「個々の現実の連関と文化意義」であるが、前者「現実の連関」は、「経済」という「特定の『一面的』観点を」からみたそれであることは先ほど見た。「文化意義」が「具体的な目的の根底にある理念」を意味することも既に確認されている。ここで新たに付け加えられたのは「歴史」であるから、これまでのところ、

▶38 客観性論文、p.65。

▶39 同上、pp.72-73。

▶40 同上、p.73。

ウェーバーにとって「理解」とは、「経済」「理念」「歴史」を解明することを意味する。「歴史的にかくなくて他とはならなかった」(geschichtliches So-und-nicht-anders-Gewordensein) はウェーバー苦心の表現であり、リッケルトの「歴史的個体」(das historische Individuum) の言い換えである。

「さて、社会科学の関心の出発点は紛れもなく、われわれを取り囲む社会的文化生活の、現実には、それゆえ個性的に、形成された姿である。社会科学は、この姿の、普遍的な、しかしだからといって個性的に形成されていることにはもとよりいささかも変わりのない連関と、それが、他の、もちろんこれまた個性的性質をそなえた社会的文化状態から生成されてきた経緯とを、究明する」⁴¹

▶41 同上、p.77。

「社会的文化生活」が「個性的な」ものであることを繰り返し述べつつ、ウェーバーはそれが同時に「普遍的」でもあることを言う。「個性的」であるものがどうして「普遍的」であり得るのか。これまでの引用から判明していることは、ウェーバーが「われわれの知識の、そのときどきの限界」「そのときどきの歴史的状況」および「あらゆる出来事のあらゆる連関」というとき、彼は何よりも先ず「経済」を考えているということであった。いまここで「普遍的な……連関」と言うとき、彼がやはり「経済」を考えていると思うのは自然であろう。「経済」という「特定の一面的観点」から見れば「普遍的」であるのに、それでもやはり「個性的」であるものとして、「社会的文化状態」は捉えられていて、しかもそれは、同じように「個性的性質をそなえた（過去の）社会的文化状態から生成されてきた」とされる。すなわち、「歴史的」視点である。

ウェーバーが「理解」の対象とするのは経済・理念・歴史であることは先に見たが、いま「普遍的」が「経済」への言及であり、「生成」が「歴史」への言及であるとする、と、「個性的」は「理念」への言及ということになりそうである。ウェーバーははたして「理念」が社会現象を「個性的なもの」として考えているのかどうか、注目して行かなければならない。

4 価値理念

これまでの引用例では、「特性」が「文化意義」と関連して述べられ、「理念」が「意義」とともに語られていた。ウェーバーにおいて「理念」＝「意義」＝「個性」の等式が成り立つかどうかを見て行きたい。

次の引用では、法則的理解が社会科学の認識にとって無用のものではないこと、しかし、自然科学では研究の到達点である法則的理解は、社会科学においては認識の出発点であることが語られている。

「われわれにとり、実在の認識として問題なのは、上述の（仮定上の！）『諸要因』が歴史的に相集い、われわれにとって意義のある文化現象として表れてくるさいの、その〔独自の〕布置連関であり、われわれが、そうした個性的な集合を『因果的に説明』しようとすれば、つねに、他のまったく同様に個性的な集合に遡行せざるをえず、ここから、われわれは、そうした個性的な集合を、もとより上述の（仮定上の！）『法則』概念を用いて『説明』することになる、という事情である。それゆえ、上述の（仮定上の）『法則』や『要因』を確定することは、われわれにとっては、いずれにせよ、われわれの追求する認識に到達するためのいくつかの研究段階のうち、最初の段階にすぎない」⁴²

▶42 同上、p.81。

「実在の認識」が現実科学としての（新しい）社会科学の目標である。そして、そのために必要なことは、「経済」「理念」「歴史」の解明である。「歴史的に相集い」が社会現象の歴史性の指摘であることは自明であり、「文化現象」が「われわれにとって意義のある」のは、その根底に「理念」が潜むゆえだとするのがウェーバーの立場である。残るのは「経済」であるが、ここにもそれが語られているとするならば、それは「因果的説明」「法則」である他はない。上の引用の最後の部分は、「実在の認識」は先ず経済的「法則」という「特定の一面的観点」からなされるべきで、それは研究の「最初の段階」として重要であるが、「最初の段階にすぎない」ものであることも忘れてはならない、と読むべきであろう。

「上述の『諸要因』の、そのつど歴史的に与えられた個性的な集合と、それら『諸要因』の、この歴史的集合によって制約された、具体的な、独特の意義をそなえた協働作用とを、分析し、秩序づけて叙述すること、そしてとりわけ、この意義の根拠と性質を理解させることが、第2の段階であろう。……つぎに、すでに生成したこの集合のもつ、現在にとって意義のある個々の個性的特徴を、できるかぎり過去にまで遡り、これまた個性的な先行の布置連関から、歴史的に説明することが、第3の段階であろうし、——最後に、未来における可能な布置連関を見定めることが、考えられる第4の段階となろう」⁴³

▶43 同上、pp.81-82。

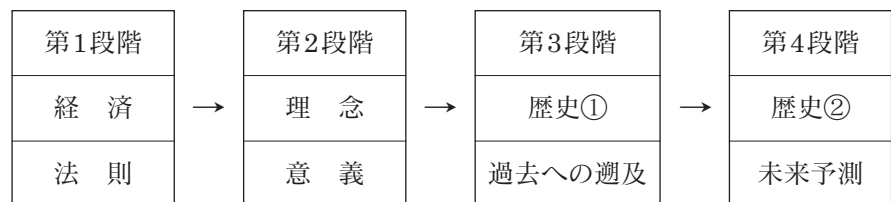
「諸要因」の集合が、自然科学では「類型的」なものとなるのに、社会科学では「個性的」なものとなることが強調されている。集合は「歴史的」に「制約」されているということで「個性的」だと言われているように読めるが、そうではなくて、ウェーバーが「個性的」というとき、「理念」が考えられているというのが私の予想である。もしこの予想が正しいならば、「諸要因」の「具体的な、独特の意義をそなえた協働作用」の「根拠と性質」として「理念」が考えられていることになる。ということは、「理念」は「要因」の1つではなくて、「諸要因」の「協働作用」のうちに現われる何かだと考えられているようである。

引用の後半部は、「歴史」について語っている。ウェーバーにおいては、

社会現象は先ず経済的法則から考察され、次いで「理念」が探究され、それから「歴史」の考察が来る。「すでに生成したこの集合のもつ、現在にとって意義のある個々の個性的特徴」とは「理念」であろうから、ウェーバーにとって「歴史的」考察とは「理念」生成の歴史ということになり、ゆえに「理念」の確認が第2段階で、「歴史」が第3段階とされる。ウェーバーの歴史研究は、現在の「個性的な布置連関」（すなわち、現在の理念）を「個性的な先行の布置連関」（すなわち、過去の理念）から「歴史的に説明する」ことを意味するわけで、彼自身はこの方法を、「資本主義の精神」（現在の個性的な布置連関）を「プロテスタンティズムの倫理」（過去の個性的な布置連関）から説明するなかで実践してみせた、と言える。

ウェーバーはさらに「未来における可能な布置連関を見定める」ことを学問の課題としているが、彼は「理念」の展開に「法則」性を認めないはずなので、「未来」の予測がどうして可能なのか、ここだけでは分からない。

この4段階のプロセスは、ウェーバーが「理念型」構築の手順を述べたものと考えていいだろう。試みに、これを図示してみる。



（第4段階の「未来予測」は、ドイツ歴史学派のいう意味での「政策」を指しているのかもしれない。ウェーバーが「未来における可能な布置連関」というとき、「政策目標」を思い浮かべている可能性がある。ウェーバーとドイツ歴史学派については、第2論文で触れる。）

ウェーバーが「意義」または「文化意義」について語るときは、必ず「理念」が関わっていた。次の引用では、それが「価値理念」と呼ばれている。

「文化の概念は、ひとつの価値概念である。経験的实在は、われわれがそれを価値理念に関係づけるがゆえに、またそのかぎり、われわれにとって『文化』であり、文化とは、实在のうち、価値理念へに関係づけによってわれわれに意義あるものとなる、その構成部分を、しかもそのみを、包摂するのである。そのつど考察される個性的实在のほんのわずかな部分が、そうした価値理念に規定されたわれわれの関心によって色彩づけられ、そのみが、われわれにとって意義をもつ。それが意義をもつというのは、そのわずかな部分が、価値理念との結合によって、われわれにとって重要となる関係を提示するからである。それゆえに、またそのかぎりにおいて、その部分が、その個性的特性において、われわれにとって知るに値するものとなるのである」⁴⁴

すでに見たように、ウェーバーのいう「理念」は、経済法則にもとづく

「諸要素」の布置連関のうちに現れる何かであるが、ここでは、その「理念」のうち、「価値理念」は「われわれの関心」を「規定」とすると同時に、「価値理念と結合」した「個性的實在のほんのわずかな部分」に「意義」を付与するとされている。そして、その部分のみが「知るに値するもの」とされる。「われわれの関心」はこれまで言われてきた「意欲」と同じであろうか。ならば、「主観的な意味」とも重なるはずである。今ここで「価値理念に規定されたわれわれの関心」と述べられた以上、「意欲」「主観的な意味」もやはり「価値理念に規定された」ものということになる。しかし、興味深いことに、ウェーバーは、「価値理念」こそすべてで、行為者の主観も目的もすべて「価値理念」に規定されたものにすぎないという言い方はしていない。上の引用の一見混沌とした叙述が、ウェーバーのしている構造の複雑さを語っている。

ウェーバーが目指す新しい社会科学は、「〔主観的に抱かれた〕意味をそなえた人間の行為」から出発するものであった。その「主観的な意味」（関心）は「価値理念に規定された」ものであるが、實在は、そうした「価値理念に規定されたわれわれの関心」によって「色彩づけられ」ることによってのみ、しかもその「ほんのわずかな部分」のみが「われわれにとって意義をもつ」とされる。「理念」とは「意欲された目的」の根底に潜むものであるから、そのあり場所は私たちの魂の奥底である。この場合の「理念」は「主観的理念」である。一方、「個性的實在」に潜む「理念」は、「諸要因」の「独自の布置連関」のうちに現れるものとされている。これを「社会的理念」とよんでおく。さて、「意欲する人間」は、「目的」（主観的な意味＝関心＝主観的理念）をもった行為によって、實在の特定の部分を「色彩づける」。これをウェーバーは「価値理念への関係づけ」とよぶ。實在のうち、「価値理念との結合によって、われわれにとって重要となる関係を提示する」ことになった部分は、「その個性的特性において」、すなわち、「独自の布置連関」を呈することによって（ということは、社会的理念を現出することによって）「われわれにとって知るに値するものとなる」。「主観的」理念によって色彩づけられる（関係づけられる）ことによって、社会的實在は「意義」（個性的特性）を獲得する。社会的實在の「個性的特性」が「理念」にもとづくものとするならば、それは、当然のことながら、「社会的」理念に基礎をおくものであろう。「主観的」理念を担う「意欲する人間」が「行為」によって「實在」に働きかけることで、實在に「個性的意義」（「社会的」理念）を付与する。それが「文化」なので、新しい科学は「文化科学」と呼ばれる。これが、ウェーバーの主張であるように読める。

「われわれが追求するのは、歴史的な、ということはつまり、その特性において意義のある、現象の認識にほかならない。そのさい決定的なのは、かぎりなく豊かな現象のかぎりある部分だけに意義がある、という前提に立って初めて、個性的な現象の認識という思想が、およそ論理的に意味をもつということである」⁴⁵

▶45 同上、p.86。

▶46 リッケルトから借用したこの概念について、ウェーバー自身はこう定義している：「歴史的現実のなかのその文化意義という観点から概念的に組み合わせて作り上げられた一つの全体と

▶47 リッケルト、前掲書、p.92。

▶48 客観性論文、p.93。

新しい社会科学の目標は「実在の認識」であるが、その「実在」とは、「歴史的な」＝「その特性において意義のある」現象である、とここで定義された。「意義」とは「理念との関係づけ」であるが、「特性において」と言われるのは、普遍性（＝法則性）は問題にならないという意味である。「かぎりなく豊かな現象」は、理念と関係づけられることによって、その「かぎりある部分」が「歴史的」なもの、すなわち、「個性的な現象」となる（リッケルトのいう「歴史的個体」⁴⁶⁾。

5 文化人

理念型は、文化的・社会的事象が一義的に経済によって規定されるものではないことを述べたものであるが、「理念（＝意義）」を担うのは誰か、という問題が残っている。

「『文化』とは、世界に起こる、意味のない、無限の出来事のうち、人間の立場から意味と意義とを与えられた有限の一片である」⁴⁷⁾

ここで述べられていることはほとんどすべて、これまで言われてきたことの繰り返しであるが、ただ一つ「人間の立場から」が新しい付加である。この「人間」はどういう人間であるかを考えてみたい。

「いかなる文化科学の先験的前提も、われわれが特定の、あるいは、およそなんらかの『文化』を価値があると見ることにではなく、われわれが、世界にたいして意識的に態度を決め、それに意味を与える能力と意思とをそなえた文化人である、ということにある。この意味がいかなるものであろうとも、それによってわれわれは、人生において、人間協働生活の特定の現象を、この意味から評価し、そうした現象を意義あるものとして、それにたいして（積極的ないし消極的に）態度を決めるのである。そうした態度決定の内容がいかなるものであろうとも、——この現象が、われわれにとって文化意義をもち、この意義によって初めて、その現象が、われわれの科学的関心を引くのである」⁴⁸⁾

「文化科学の先験的前提」は、ウェーバーによれば、文化の存在ではなく、「文化人」（Kulturmenschen）なる人間類型の存在である。その代表は「文化科学者」であろうから、これは、すでに見た「思考する科学者」と同じであると言える。「世界にたいして意識的に態度を決める」とは、「価値理念への関係づけ」が「文化人」にあつては「意識的に」なされることを意味するはずである。「文化人」にそれが可能なのは、前に引用した部分を

もう一度繰り返せば、「文化人」は「(われわれの知識の、そのときどきの限界内で) いかなる手段が、ある考えられた目的を達成するのに適しているか、それとも適していないか、ある妥当性をもって確定することができる」⁴⁹からである。多様な世界（「人間協働生活」）の「特定の現象」が、「文化人」によって「意味」を与えられることによって（これは、行為の観点から言えば「態度決定」となる）、「科学」（すなわち、「文化科学」または社会学）の対象となる。科学者の決定または選択が「ある妥当性をもって」なされる、というときの「妥当性」は、リッケルトによれば、「(当該社会の) すべての成員がそれに従うことを義務とを感じる」という意味である⁵⁰。それにしても、科学者はなぜそういう重大な能力をもち得るのだろうか。

「われわれが、歴史家や社会の研究者に、基本的前提として、重要なものと重要でないものとを区別することができ、そうした区別に必要な『観点』を所持していることを要請する」のも、ただ、かれが、実在の事象を——意識してか無意識裡にか——普遍的な『文化価値』に関係づけ、これを規準として、われわれにとって意義をもつような、そうした連関を取り出すすべを心得ていなければならない、という意味である」⁵¹

科学者がそういう能力を持つ、のではなく、そういう能力を持つ人間を科学者と呼ぶ、という論理で、「要請する」「ねばならない」はそれ以外に意味の取りようのない表現である。これはウェーバーが「カリスマ」について述べるときの論理と同じである。「文化価値」は新しい表現であるが、これまでの「価値理念」と同じであろう。それが「普遍的」であるとされるのは、妥当性が念頭にある以上、当然であるが、すでに見たウェーバーの特徴的な表現「普遍的な、しかしだからといって個性的に形成されていることにはもとよりいささかも変わりのない」⁵²が、ここでも思い出されるべきであるならば、「普遍的」であるのは、そこに「経済」が考えられているからであろう。

「こうして、世界に起こる出来事のなかから、個々の特定の『側面』が、つねに、またいたるところで、意識的ないし無意識的に選択されているのであるが、この選択を支配するのは、しばしば耳にする次の主張の根底にある、文化科学的研究の基本要素である。すなわち、科学上の著作における『人格的なもの』こそ、その著作にあつて、本来、価値のあるものであり、おのおのの著作にはそれぞれ他とは異なる存在価値がなければならないとすれば、そこにはやはり『一個の人格』が表明されていなければならない、という主張である」⁵³

科学者は「一個の人格」でなければならないとするこの主張をいわゆる人格主義的なものと理解すると誤る。「人格的なもの」(das Persönliche)は、ウェーバーが「カリスマ」を表現するときに好んで用いた表現である

▶49 同上、p.31。

▶50 リッケルト、前掲書：「価値は、それが現実的に存在するか否かを問うことはできぬ、ただ妥当するかどうかを問得るのみである。ところが文化価値なるものは、事実上すべての人間によって妥当と認められるか、それともその妥当性（とともに、文化価値の付着する諸客体の全く純粋に個性的な意義）が少くとも一人の文化人によって要請されるか、そのいずれかである。……文化は、……我々が我々の住む社会を顧慮して（あるいは別の理由から）その価値を認めて養護することを、多かれ少なかれ『義務』と感ずるような、そういう財でなければならない」（強調リッケルト、pp.52-53）。

▶51 客観性論文、p.94。

▶52 同上、p.77。

▶53 同上、p.95。

から、彼にあっては、科学者＝カリスマと考えられていることの、これも傍証となる。しかし、それが「文化科学的研究の基本要素」とされていることは意外である。

「研究者の価値理念がなければ、素材選択の原理も、個性的実在の有意義な認識もないであろう。また、なんらかの文化内容の意義にたいする研究者の信仰がなければ、個性的実在を認識しようとするいかなる研究も端的に無意味であるのと同様、かれの個人的信仰の方向、かれの魂に映ずる価値の色彩の分光が、かれの研究に方向を指示するであろう」⁵⁴

▶54 同上、pp.95-96。

人間の行為について「主観的に抱かれた意味」を前提とするウェーバーが、研究者の行為に関しても、「主観的意味」から出発するのは当然であると見えるが、しかし、それが「研究者の価値理念」「研究者の信仰」「かれの個人的信仰」「かれの魂」というふうに、宗教的ニュアンスとともに語られていることに注目したい。宗教が、個人的なものであると同時に、集合的なものである両義性をもつものであることから、ウェーバーは、研究者の価値理念が社会全体の価値理念と一致する仕組みをそこに見ようとしているのであろうか。

「そういうわけで、われわれの意味における文化科学的認識は、実在の構成部分のうち、われわれが文化意義を付与する事象と——いかに間接にであれ——なんらかの関係をもつ部分だけを取り上げるかぎり、『主観的』な前提と結びつけられている。それにもかかわらず、文化科学的認識は、質的な性格をそなえ、個性的で重要な自然事象の認識とまったく同じ意味で、純然たる因果認識であることにもとより変りはない」⁵⁵

▶55 同上、p.96。

この引用の後半で言われている「質的な性格をそなえ、個性的で重要な自然事象」とは天文学、特に、「ある個性的に形づくられた星座」⁵⁶を念頭においている。ここでウェーバーは、文化科学的認識が「主観的」価値理念を前提としつつ、「純然たる因果認識」（すなわち、原因と結果の科学的・客観的認識）であることを主張している⁵⁷。なぜなら、彼の考える文化科学的認識は、「研究者の価値理念」（信仰）によって選び出されたものの歴史的説明を要求するからである。すでに引用した「実在の認識」4段階説の第3段階をもう一度引用する。

▶56 同上、p.76。強調原文。

▶57 文化科学の因果認識が、自然科学のそれと「全く同じ」であるかどうかを、私は第2論文で論じるつもりである。

「すでに生成したこの集合のもつ、現在にとって意義のある個々の個性的特徴を、できるかぎり過去にまで遡り、これまた個性的な先行の布置連関から、歴史的に説明することが、第3の段階であろう」⁵⁸

▶58 同上、p.82。

私たちは、ウェーバーが「現在にとって意義のある個々の個性的特徴」（例えば、資本主義の精神）を、「個性的な先行の布置連関」（プロテスタンティズムの倫理）から「歴史的に説明」した実例を知っているから、この

部分を理解することは容易である。ただし、ウェーバーがここで述べていることは、自分が成し遂げたことの解説ではなく、社会において「主観的なもの」が「客観的なもの」に転換して行く仕組み⁵⁹における「歴史」の方法論的役割である。

「なにが探究の対象となり、その探究が、無限の因果連関のどこまでおよぶか、を規定するのは、研究者およびかれの時代を支配する価値理念である」⁶⁰

この部分も、いま見たような「歴史」の役割の考察を経て、初めて理解できるものとなる。「研究者の価値理念」（主観的なもの）と「かれの時代を支配する価値理念」（客観的なもの）が一致するということは、一般人にあっては偶然であるが、研究者は前者の「歴史的説明」を探究する過程で、両者を「意識的に」⁶¹一致させることが可能となる。そのとき、研究者の主観的価値理念は、「歴史的にかくなくて他とはならなかった」⁶²ものとして、客観的なものと認識されることになる。

これまで見た限りでのウェーバーの方法論は、「社会的行為の主観的意味」と「客観的価値理念」（研究の前提）、「理念への関係づけにもとづく文化意義」（研究対象）、「経済・理念・歴史」（研究方法）として構造化できるように思う。

6 理念型

客観性論文の終りの方は「理念型」の提唱に当てられている。繰り返しになるが、最後の、「研究方法」を明確化したものが「理念型」である。ウェーバーの考える「理念型」は、現実の模写ではなく、「思考によって構成された、事象の理想像」である。現実はあまりに多様なので、そのままの形でこれを記述することは不可能である。「思考によって構成する」とは、常に単純化する、ということである⁶³。

「思考によって構成されるこの像は、歴史的な生活の特定の関係と事象とを結びつけ、考えられる連関の、それ自体として矛盾のない宇宙をつくりあげる。内容上、この構成像は、実在の特定の要素を、思考の上で高めてえられる、ひとつのユートピアの性格を帯びている」⁶⁴

「理念型」を説明したこの部分の、最初の下線部が少し分かりづらい。これは何を指すものであろうか。前にも述べたように、「特定の」というときには、概して、経済が考えられている。とするならば、ここで「歴史的

▶59 ウェーバーはこれを「因果帰属」と呼ぶ。詳しくは第2論文で。

▶60 同上、p.99。

▶61 同上、p.45。

▶62 同上、p.73。

▶63 リッケルト、前掲書：「試みに一度現実を精確に『記述』してみるのがよい。つまり、現実とそのあらゆる細部を『有るがままに』概念の中へ取り入れて、その模像を作ってみるのがよい。すると多分直ちに、そういう企ての無意味であることが解るであろう。すなわち経験的現実とは、我々には見極めがたく多様であり、我々がそれに沈潜しそれを細かく分析し始めるに依じて、その多様性はますます大きくなるように見える、ということが判明するからである。何となれば、『最も小さな』断片でも、その内容は誰か或る有限の人間の記述し能う以上のものであり、それどころか、彼がその概念の中に、ひいてはその認識の中に取り入れ得るものは、彼が看過するに違いないものに比すれば、まるでもう見る影もないほど僅少なのであるから」（強調リッケルト、pp.66-67）。

▶64 客観性論文、pp.111-112。「考えられる」「思考の上で」「ユートピア」の下線はウェーバー。

生活の特定の関係」という表現で言われているものは、やはり「経済」であろうと思う。経済法則による、事象の把握は、ウェーバーによれば、社会科学的認識の「最初の段階」であったが、ここで言われている「それ自体として矛盾のない宇宙をつくりあげる」はそれを言っているように思われる。後半の下線部「実在の特定の要素」は「理念」であろうと思う。なぜなら、その要素が「思考の上で高められる」のはその部分が意義をもつからであるが、実在のある特定の部分が意義をもつのは「価値理念への関係づけ」による、というのがウェーバーの基本的考えであるから。「ユートピア」は、それが現実の模写ではないことの強調で、これ以降も何度も出てくる。

「こうした理念型が獲得されるのは、ひとつの、あるいは二、三の観点を一面的に高め、その観点に適合する、ここには多く、かしこには少なく、ところによってはまったくなく、というように、分散して存在している夥しい個々の現象を、それ自体として統一されたひとつの思想像に結合することによってである。この思想像は、概念的に純粋な姿では、現実のどこかに経験的に見いだされるようなものではけっしてない。それは、ひとつのユートピアである」⁶⁵

▶65 同上、p.113。

「ひとつの、あるいは二、三の観点を一面的に高める」を「任意の観点の強調」と理解すると誤る。理念型を操作的な方法または作業仮説とする誤解はこのあたりから生まれてくるのであろうが、ここで「一面的に高める」とされる観点は、当然のことながら、「価値理念への関係づけ」によって「意義を付与された」観点である。「それ自体として統一されたひとつの思想像」は、先の引用にあった「それ自体として矛盾のない宇宙」と同じものとするならば、その根底には、やはり、経済があるということになる。「ひとつのユートピア」は理念型が現実の模写でないことの強調であるが、それと同時に、そういうもの（「概念的に純粋な姿」）が現実の認識に不可欠なものであることの主張でもある。

「まったく同様の仕方で、『手工業』の『理念』を、ひとつのユートピアのうちに描き出すことができる。すなわち、さまざまな時代と国の工業経営者の間に散在している一定の諸特徴を、それぞれ一面的に、その帰結にまで高めて、それ自体として矛盾のないひとつの理想像に結合し、それらの諸特徴を、この理想像のなかに表明されている思想表現に関係づけるのである」⁶⁶

▶66 同上、p.114。

この部分は基本的にこれまでの繰り返しであるから、改めて引用する必要はないようなものであるが、下線部が新しい要素なので引いてみた。理念型を構築することによって「表明される」「思想表現」とは、「理念」そのものであるように思える。「経済」の視点から整理された事象が「理念への関係づけ」によって「一面的に高められた」ものが「理念型」であるが、

事象に意義を付与する「理念」は「理念型」を構成することによってしか確認できないという相互関係がある。次の、「資本主義的産業組織の理念型」について述べた部分も同じことを語っていると思う。

「それには、近代の物質的ならびに精神的な文化生活に散在している個々の特徴を、それぞれの特性について思考の上で高めて、われわれの考察にとって矛盾のないひとつの理想像に結合しなければならないであろう。そうすれば、それは、資本主義文化のひとつの『理念』を描き出す試みとなるであろう」⁶⁷

▶67 同上、pp.114-115。

理念型においてある一面を「思考の上で高める」ことができるのは、その部分が「理念」に関係づけられているからであることは何度も述べた。つまり、先ず「理念」があつて、「理念型」が作られるわけであるが、しかし、その「理念」を明確に認識するためには、「理念型」を構成する以外に方法がないことが上の引用の下線部でまた語られている。

この後、ウェーバーは、理念型が1つの事象に対して1つとは限らないこと⁶⁸、文化現象に意義を付与する「価値理念」はさまざまなものであり得ること⁶⁹、「歴史的實在の認識」⁷⁰こそ目的であつて、理念型の構成は1つの手段にすぎないこと、理念型を「規準として實在を測定し、比較し」「特定の意義ある構成部分」（すなわち、「理念」に対応する部分）を浮き彫りにすることができること⁷¹、理念型は「歴史的個体あるいはその個々の構成部分を、発生的な概念において把握しようとする試みである」⁷²こと等々を述べる。

▶68 同上、p.115。

▶69 同上。

▶70 同上、p.116。

▶71 同上、p.119。

▶72 同上、p.120。

客観性論文の最後で述べられていることは、この理念型構成がはたして「認識の客観性」を保証するかどうか、という問題である。

「歴史的な概念の『本来の』『真の』意味を確定しようとする試みは、つねに繰り返されているが、決して完結しない。……概念内容の一義性をぜひとも手に入れようとするれば、当の概念は抽象的な理念型となり、したがってひとつの理論的、それゆえ『一面的』観点であることが明白となってくる。實在は、この観点のもとに光を当てられ、この観点に関係づけられるが、当の観点はしかし、實在が余すところなく組み入れられるような図式には、もとより適していない」⁷³

▶73 同上、p.145。

理念型が實在のある特徴を「一面的に高めて」構成されるものであることはすでに何度も見た。それは、そうすることで「概念内容の一義性」（これまでの表現で言えば「それ自体として統一されたひとつの思想像」）を手に入れるために必要不可欠のことであるが、それは、文字どおり「一面的」「抽象的」なものであらざるを得ない。理念型は「實在が余すところなく組み入れられるような図式」には適していない。問題は、このことと「認識の客観性」との関係である。

「というのも、われわれがそのときどきに意義をもつ実在の構成部分を把握するために欠くことのできない思想体系は、いずれも、実在の無限の豊かさを汲み尽くすことはできないからである。これらの思想体系はいずれも、そのときどきのわれわれの知識の状態と、そのときどきにわれわれが使用できる概念形象とにもとづいて、そのときどきにわれわれの関心の範囲内に引き入れられる事実の混沌のなかに、秩序をもたらそうとする試み以外のなにものでもない」⁷⁴

▶74 同上、pp.145-146。

ここにある「思想体系」は理念型、または理念型のうちに「表明されている思想表現」⁷⁵と同じものであろう。それが「実在の無限の豊かさを汲み尽くすことはできない」ことは、すでに何度も確認した。この引用部分で特徴的なのは「そのときどきに (の)」の執拗な反復であり、これは、明らかに、認識の歴史的被制約性の指摘であると同時に、この個所が客観性論文の最初の方に「われわれは、(われわれの知識の、そのときどきの限界内で) いかなる手段が、ある考えられた目的を達成するのに適しているか、それとも適していないか、ある妥当性をもって確定することができる」⁷⁶とある個所と呼応していることのヒントであろう。私たちの認識が「事実の混沌のなかに、秩序をもたらそうとする試み」であって、しかも、その「秩序」も「そのときどき」のものであらざるを得ないということは、自然科学的認識が「法則」の発見によって客観的であるとされる意味で、社会科学の認識は客観的ではあり得ないということを意味する。それでは、社会科学の認識はそれ自体として意味のないものであるかということ、そうではない。過去の人々が彼らの理念への関係づけによって構成した理念型は、その当時の知識の限界内で、「ある妥当性」を持っていた。私たちは、私たち自身の限界内において、理念への関係づけと、先人の構成した理念型との闘争の中で、新しい妥当な理念型を構成しようとする。そこに「文化科学的研究の進歩」⁷⁷（科学的概念史としてのの）がある。

▶75 同上、p.114。

▶76 同上、p.31。

▶77 同上、p.146。

「科学のみが寄与できる事柄とは、経験的実在〔そのもの〕でもなければ、経験的実在の模写でもなく、ただ経験的実在を思考により妥当な仕方で秩序づける、概念と判断である」⁷⁸

▶78 同上、p.158。強調ウェーバー。

「経験的実在を思考により秩序づける」は、言うまでもなく、理念型構成のことであるから、それが「妥当な仕方で」と言われるのは、妥当性が理念型構成の過程そのものから生まれて来ることの指摘であろうと思う。私たちは、「経験的実在そのもの」を認識することはできないし、「経験的実在の模写」をすることもできない。実在のもつ「無限の豊かさ」ゆえに、それは不可能である。可能なのは理念型を構成することで（これは、「理念型史」を構成することと等しい）、そうすることによって「経験的実在」に意義が付与されるために、そして、その意義は主観的なものであると同時に、客観的なものであるゆえに、そこに妥当性が生じる。

「われわれはすべて、われわれ自身の生存の意味が根ざすと見ている究極かつ最高の価値理念の超経験的な妥当を、何らかの形で心のなかに信じているが、この信仰は、経験的実在がそのもとに意義を獲得する、具体的な諸観点のたえざる変遷を排除せず、かえってこの変遷を内包している。すなわち、生活は、その非合理的な現実性において、また、可能なその意義の豊かさにおいて、汲み尽くされることなく、価値関係の具体的な形成は、つねに流動的であり、人間文化の幽遠な未来に向けて、たえず変遷を遂げる運命にある」⁷⁹

▶79 同上、p.159。

「われわれ自身の生存の意味が根ざすと見ている究極かつ最高の価値理念」がやや唐突に言及されたが、「客観性論文」の最初の方にあった「究極において意欲されたもの」⁸⁰と、多くのページを隔てて、呼応しあっている。「究極かつ最高の価値理念」が現実（「汲み尽くされることなく」豊かなもの）を構成する重要な一要素であるとして、それを文化科学が科学的に取り扱うには、理念型を構成することによって理念を描き出し、しかもその変遷史を叙述する以外にない、というのが、1904年時点におけるウェーバーの方法論であった、と言えるように思う。

▶80 同上、pp.30-31。

7 まとめ（中間的なそれとして）

テンブルックの言うように、「客観性論文」でウェーバーの方法論は尽きているのであれば、私の論文もここで終わっていいわけであるが、すでに述べたように、私はその意見に賛同しないので、私のウェーバー分析はもう少し続く。ゆえに、この「まとめ」はあくまで「中間的なまとめ」であるが、これまで明らかになったことを、この論文執筆の根底にある「メディア研究の視点」からどう評価するかについて、簡単に述べておきたい。

文化科学の対象は、具体的現実の総体ではなく、現実の外にある「価値理念」との関係づけによって「意義」を付与された部分に限られる、というのがウェーバーの基本的立場であるが、この「現実の外にある価値」がどのようにして現実と「関係づけられ」、どのような「意義」を付与するか、に、当然のことながら、メディア研究は関心を持つだろう。なぜなら、そこにメディアの役割が想定できそうであるから。ただし、ウェーバーはそこから「究極かつ最高の価値理念」の方向（それは、例えば、「世界宗教の経済倫理」の方向）に深化して行った。それは必ずしもメディア研究の方向性ではないと思う。メディア研究は、すでに触れたように、「世論」及び「大衆の判断と大衆の信仰の形成と解体」の方向を志向するであろう。ウェーバー方法論はカリスマを好むが、メディア研究は、小さなカリスマたち

がメディアによっていかに増幅されるか、そしてそのことと「世論形成・解体」の関係を知ろうとするだろう。「客観性論文」以後のウェーバーにヒントがないかどうか、もしあるとすれば、それはどのような概念かを探究することが、以後の続編の課題となる。